

---

# 恋の悩みを知る君は

来栖ゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の悩みを知る君は

### 【Nコード】

N8407X

### 【作者名】

来栖ゆき

### 【あらすじ】

見知らぬ外国人からの突然のプロポーズ。  
けれどそれは人違いで……。

ひよんな事から日本で恋人を探すイタリア人ベルナルドとの不自然な同棲生活が始まったOLアゲハ。

叶わぬ恋だと知りながらもだんだんと彼に惹かれてしまう、苦しくて甘い片思い。

アゲハの日常が少しずつ変わっていく恋物語。  
この恋、どこへ飛んでいく――？



「結婚しよう……」

見知らぬ外国人からの、突然のプロポーズ。

慈愛に満ちた青い瞳に見つめられ、あたしは何も言えなくなってしまった。

彼はその場に片膝をついてひざまづ跪き、あたしの左手の甲にそっと口づけをした。

その瞬間、心臓がトクンと跳ねる。

彼は器用にも片手で小箱の蓋を開けると、中から青い宝石の付いたシンプルな銀色のリングを取り出した。

そして、あたしの左手の薬指にゆっくりと通す。

あれ、あたしこの人と結婚するの——？

◆1◆

月末で、金曜日で、残業で、コンビニ弁当と缶チューハイの入ったビニール袋片手に、一人暮らしのアパートへ帰ってきた夜9時43分の事だった。

あたしの部屋の前に見知らぬ男が座っている。視線は空に昇った細い三日月。

日本人とは思えない、鼻筋の通った横顔が印象的だった。毛先が少しカールしている黒髪は耳にかかるくらいの長さ。

あえて言おう、イケメンだーと。

彼はあたしに気付くと、サファイヤのような青い瞳でじっと見つめてきた。

やめてよ、ちょっとドキドキしてきちゃうじゃない。

「あの、あたしの部屋なんですけど、何か御用ですか？」

って、日本語が通じるとも思えない。でも英語で何て言えばいいのか解らない。

どうしようかと思い悩んでいたら、その外国人はすっと立ち上がった。

濃いネイビーブルーのジーンズに黒のTシャツ。ぱっとしない服装だけどなんでだろう、外国人が着ると何でもカッコイイって思ってしまう。

しかもこの人、背がめっちゃくちゃ高い。多分180センチ以上あると思う。160センチのあたしと比べて、だけど。

だから彼が立ったら結構な角度で見上げる形になった。

そして何故か、満面の笑顔であたしを見ている。

何で……？

そして、件のプロポーズ……。

「あれ、おかしいな」

彼の意見に激しく同意。確かに色々とおかしい。

リングのサイズが小さすぎで第二関節で止まった。

こう……プニっと。

リングの周囲にはみ出たお肉が乗っている。

それから、どう考えてもこの人とあたしは初対面のはずだ。「結婚しよう」の前に「初めまして」という挨拶の方がしっくりくる。

そして極めつけ。この外国人、日本語が流暢すぎる。その青い目は本物？

彼はどうにかリングを指に通そうとするが、第二関節の骨はリングの内径よりも太いのは明らかだ。

いい加減恥ずかし過ぎるんですけど……。

遠回しに太っているのでは？と仄めかされている気がしてならない。一応服のサイズは9号なんだけどね。

女性としてこういう所は敏感なのだ。

「あの、いくらやっても入りませんけど」

ちよつとムツとした声になってしまった。だって初対面で「指、太くね？」みたいな事されたら誰だってムツと思う。

彼は跪いたままの姿勢からあたしを見上げた。指輪を押し込むことを中断すると、優雅な仕草で立ち上がる。

けれど手は握ったまま。

秋風に冷えたあたしの指先は、彼の熱によって温められている。

「でも、リングのサイズは7号と聞いたよ？」

あたしは聞かれた事ないけど、9号ですから！

——彼が跪いて手の甲に口付けした時、どこかの国の王子様かと思っただのは確か。駅のホームかどこかの横断歩道ですれ違って、こ

の人はずっとあたしを探していたのだ。

家来に命じて居場所を見つけ、こうしてあたしを迎えに来た。そう、プロポーズをする為に。きっとアパートの前にはカボチャの馬車カリムジンが待っているのだ。

金髪じゃないのは百歩譲って許そう。

なんて、手の甲への口付けからリングが指にプニっ事件までの間、あたしの脳裏を駆け巡ったその妄想は、リングのサイズが合わなかったという辱め<sup>はずかし</sup>により、ガランガランと音を立てて崩れ落ちた。って言うか、家来っていつの時代の王子よ。しかも王子が駅のホームとかいないから！

まったくもって自分の妄想に辟易する。

そう、これは、きつと……。

「人違いです。誰か他の女性と間違えていませんか？」

「僕だよ、ベルナルドだ」

会うのは久しぶりだから解らないかな、と苦笑いで微笑む初対面の男に、あたしも苦笑いで返す。

「ごめんなさい、本当に人違いだと思う」

だって、プロポーズしてくれる外国人の知り合いなんてあたしにはいないんだもん。

あたしの名前は深山揚羽<sup>みやまあげは</sup>——読んで字の如くミヤマアゲハ、26歳。

蝶でもなければキャバ嬢でもない。正真正銘、あたしの本名。疑うなら免許証見せようか？

こんな名前を付けた親を恨みがましく思った事もあったけれど、この変な名前のお陰で第一志望の大手IT企業に就職できた。

「ミヤマアゲハって蝶々だよね？」

面接で開口一番にそんな質問を投げかけた人事部長の趣味はまさかの登山と写真だった。最初は意味がわからなかったけれど、山に

登って蝶や花の写真を撮るのだそう。

お陰で内定即ゲット！

安定した会社でそこそこ良い給料を貰いながら、営業事務4年目。悲しいかな、彼氏イナイ歴も4年目に突入。就職と同時に年下の彼氏とは別れてしまったから。

このアパートには引越しをして明日で1週間。別に新しい一步を踏み出したかったわけじゃないんだけどね。

会社からは2駅という距離で、アパートの前にはやや大きめの自然公園がある。結構気に入っている立地なのだ。

「どうぞ……」

まあ、インスタントコーヒーなんだけど。

彼はありがとう、と日本語でお礼を言って一口飲んだ。

あたしはコーヒーにたっぷりホットミルクを注いでカフェオレにした。夕食もまだなのに、空腹にブラックはちよつと無理。

玄関を入ってすぐのリビングダイニング。猫足のテーブルを挟んで座る、あたしと、ベルナルドと名乗った外国人。

2人きり。

さて、これからどうしよう……。

「あの、もう理解はできました？　ここは1か月前から空き部屋で、あたしが1週間前に越して来たんです」

日本語が通じる事にほつとして、外があまりにも寒くて、しかも人違いだとかと信じてくれたこの人が捨てられた子犬のような瞳で、行くところがない……とか呟くものだから、ついつい部屋に入ってしまった。

まだ誰も招待した事のない部屋に。

「彼女はここにいないんですか？　ならどこにいるんですか？」

……そんなの、あたしが聞きたいわよ。

ベルナルドがプロポーズをする為に会いに来た女性は、1か月前に引っ越した後だった。



「引越し先はあたしには解らないです」

「そう、ですか……」

ああもうっ！ 幻覚だけど、垂れた耳と尻尾が見えるのは気のせい。幻覚だけど。幻覚だけどね……！

お願いだからそんなにヘコまないでよ。

「電話番号は？ メールアドレスは？ 勤め先は？ なにか聞かないんですか？」

ベルナルドは恋人から最後に届いたらしいエアメールを握っていた。

けれどそこには住所と名前しか書いていない。

そう、この住所が。

そして差出人の名前は——真田優花。さなだゆうか

彼ははるばるイタリアから、住所と名前だけしか知らない女性に結婚を申し込む為に来たのだ。

い、一途すぎる……。

頭をナデナデしたくなるのは、あたしだけじゃないハズ。

「解ったわ……明日このアパートの管理会社に電話してみます。望みは薄いけど、前の住人に連絡取ってくれるかもしれないし」

途端、ぱああと表情を明るくした。

ちよっとくらくらする。イケメンの不意の笑顔は、一人暮らしの独り者にとっては猛毒だ。

「大丈夫ですか？」

少し眩暈を覚えて額を押さえたあたしに、ベルナルドはテーブルに乗り出して心配そうな顔を向けた。

「大丈夫、デス……」

ほんとには大丈夫じゃないけれど。

## ◆2◆

ベルナルドの荷物は小さいスーツケースと瓢箪ひょうたんみたいな形をした楽器ケースだけだった。

本当に身一つで日本に来たみたい。

「あの、優花さんには日本に来る事、伝えてなかったんですか？」  
聞いていいのか解らなかったけれど、好奇心には勝てない！

プロポーズ大作戦を執行するために国境を越えて来たというのに、相手が行方不明というのはちょっと切なすぎるよね。

サプライズを計画して失敗したのならとんでもなく不憫ふびんでならない。

「伝えました。結婚を申し込むから待っていて欲しいと——」

ベルナルドはマグカップを両手で掴み、中の黒い液体をじっと見ている。

「ユーカは喜んで、待っていると手紙をくれました……」

「それは——何年前の話ですか？」

ちよっと見知らぬ優花さんに同情してしまう。女は期待させておいて待たされるのは嫌いなものよ？

「大体ひと月前です。それから色々準備をして、パスポートを用意して日本に来ました」

あら、前言撤回。

という事は、優花さんって人は待っているという手紙を投函してこのアパートを出払ったという事だろうか……。

どうしてこんなイケメンのプロポーズ予告を受けていなくなったのかしら？

あたしだったら喜び勇んで結婚雑誌を買い漁って、一人ででもいいから式場に見学に行って、そうそうあとエステにも通わなくちゃいけない。会社は……寿退社には懂れるけれど、子供が出来るまで続けるか、産休を取るか。

うーん、こればかりは相手の稼ぎによりけり、ね。

でももしイタリアに行く事になってしまったら会社は辞めないとダメだわ。あたし英語喋れないのに海外でうまくやっていけるかしら。あ、違う、イタリア語か。

どうでもいい妄想に花を咲かせていたら、ベルナルドは不思議そうな顔であたしを見ていた。急に黙って眉間に皺を寄せて、大真面目にくだらな未来を考えているあたしの顔を。

「アゲハさんが突然黙ったから、どうしたのかと思って」

「ご、ごめんなさい、優花さんがどこに行ったのかって考えていて……」

あたし、咄嗟に嘘を吐く――の巻。

会話中に妄想トリップなんて最悪だ……。

けれどベルナルドはそれを聞くと、憂いを帯びた瞳で微笑んだ。

「アゲハさんは優しい人ですね」

グフツ！

今のはダメージが大きい。本当は阿呆みないな妄想してました、なんて死んでも言えなくなってしまった。これはもう墓場まで持っていくしかない。

「それにしてもどうして手紙なんですか？ メールや電話だったらすぐ連絡がつくし、便利だと思いますけど」

「うん、どうしてかな……」

ベルナルドはテーブルに置いてあったエアメールの宛名をそっと指で撫でた。優花さんが書いた彼の住所と名前の部分を。

彼女の文字までも愛おしむような、優しい表情で。

まあ、そりゃメールよりも手紙の方があったかいし気持ちもこもってるよね。国際電話も高そうだし。

愚問でした……。

「もしかして……引越しましたっていう手紙を出したのかもしれないですね？」

とりあえずフォロー、自分に対してだけど。

「では行き違いになってしまったのかな。どうしてもユーカに早く会いたくて……性急過ぎたでしょうか？」

「そんな事ないですよ！ 早ければ早いほど嬉しいですって！」  
羨ましすぎるぞ優花さん、アナタとんでもなくイイ男にめっちゃ  
ちや愛されちゃってますけど！

でもその割には……間違えたのよね、あたしと。

「その優花さんって人は、あたしと似てるんですか？」

誰だって気になるでしょ？ イケメンをここまでメロメロにする  
女性の存在が。

あわよくば今後の参考にしなくては！

けれどベルナルドは言いにくそうに後頭部を掻いている。

もしかしてあたしなんかと間違えてしまった事が言いにくいの？

もしも優花さんがあたしと似ても似つかない美人だっていうなら、  
間違えた自分が許せないと思うのは解るけど。

解るけどね……。

その返答によっては、もれなくあたしもショックを受けるわよ？

「実は……ユーカには一度も会った事がないんです。彼女は僕の顔  
を知ってますけど」

「はあ!？」

変な声が出てしまったのは確か。あと、テーブルに乗り出してベ  
ルナルドの顔をまじまじと見たのも、彼が一瞬怯えた表情になった  
のも。

あたし、目が血走ってたかもしれない。

だっておかしすぎるでしょ、この人は顔も知らない相手にプロポ  
ーズしようとしていたの？

「5年間ずっと手紙のやり取りしかしていません」

「そう、なんですか……？」

ああそうか、だからあたしと間違えたのか。この住所に帰って  
くる女性が自分の結婚相手って事なのね？

だったら「結婚しよう」って言われた時にあたしがイエスと言え

ば良かったわけだ……。

って、良くないし！

「顔も知らない相手と、その……結婚しようと思ったんですか？」

この質問は当たり前だと思う。

見知らぬ文通相手にいい人だな、って思う事はあっても、結婚しようなんてぶっ飛んだ発想は、普通は出来ない。あたしだったら絶対そんな人からのプロポーズなんて受けないと思う。

5年間手紙のやり取りをしてプロポーズされて、OKだした後に会って、相手がとんでもなく……だったら結婚出来る？ いや、出来るのかな？ そんな状況になってみないと解らないけれども。

でも、とりあえず初期の段階で写真送り合わない？ って提案する。あたしなら。

それなのに……。

「人は顔じゃないでしょう？ 少なくとも僕は顔だけで人を判断しません。彼女は心の綺麗な女性です」

それなのにベルナルドは、あたしの遠回しな「人間顔でしょ」発言にムツとして優花さんを擁護した。

青い瞳には情熱の炎がメラメラと見えるようだ。

この人、本気だ……本気で会った事のない優花さんの事を愛している。5年間も文通して彼女の人となりを知って、それで結婚しようと思ったんだろうな。

世界の常識を覆す気なんだ……男女は出会ってから恋愛するっていう常識を。

こんなの小説か映画でしか聞いた事ない。お互い顔も知らない男女が手紙を通して心を通わせ、色々な障害を経て最後に結婚するのね！ あたし感情移入してラストで泣いちゃう気がする。

「ごめんなさい」

これは全面的にあたしが悪い。だからきちんと謝っておく。

「優花さんって……とっても素敵な人なんですネ」

そんな彼女と比べて、あたしは性格があまりよろしくないみたい。

さすがにこれはちよつとへコんだ。

最後に幸せになるのは、何があっても諦めない心の綺麗なシンデレラ……それが優花さん。あたしは何も努力しないで、いい出会い落ちてないかな、いい男いなくなるとなんてぐうたらと生活している義理のお姉さんってところね。

そして当然シンデレラの前には心優しい王子様が現れる。義理のお姉さんの前には……顔は良いのにイジワルな会社の先輩くらい？「ユーカはね、とても優しくて頑張り屋さんなんだ。僕が夢を諦めかけた時、ずっと応援してくれた。自分も頑張るから一緒に頑張ろうって言うてくれて……」

黒髪に青い瞳を持つ見目麗しい王子様（もちろん売約済）は、はにかんで頬を染め、マグカップの持ち手部分をいじりだした。

なにこの可愛い一面は！ 照れてるの？ 王子様が照れてるよっ！「じゃあ、早く見つかるといいですね」

「ありがとうアゲハさん。あなたもとても優しい人です。見知らぬ異国の人間を疑いもせず部屋に入れてくれて」

青い瞳を細めてベルナルドに微笑みかけられた。ああ、やっぱりイケメン……！

つられてあたしも笑ってしまった。多分ニッコリじゃなくてへらつとした、なんとも言えない顔になってたと思うけど。

よし、明日の朝に管理会社に電話して、解らなかつたら大家さんにも直接聞いてみよう。このアパートの隣に住んでいる大家さんは噂好きの近所のおばさんだったから。

引っ越しの挨拶に行った時、恋人はいるのかとか根掘り葉掘り聞かれた。だから優花さんの事も何か知ってると思うんだ。

そうと決まったらさっさと夕飯食べてお風呂入って――。

あれ……。

「あの、つかぬ事をお伺いしますけど、ホテルとか取ってないんですか？」

行くところがないって言うから、つい部屋に入れてしまったけど。「あ……会いたい一心で、飛行機のチケットしか取っていませんでした」

うっ。一途すぎて羨ましいぞ優花さんっ！

じゃなくって、女性一人のアパートに、さすがに知らない男を泊めるわけにはいかないでしょ。

どうしようかな、とちらっと見たら彼も察してくれたらしい。

「すみません、荷物は明日まで玄関に置かせて貰えますか？ 僕は朝までその公園にいますから」

コーヒーをご馳走様でした、と言ってベルナルドは立ち上がった。え、ちよつと待って！ 外寒いよ！ 天気予報では深夜に雨って言ってたよ！

「一晩くらいならいいですよ！」

気付いたら、あたしはそう言っていた。

ベルナルドは驚いたような顔であたしを見ている。

そりゃそうか。

初対面の男女が出会った当日一つ屋根の下……。

マチガイが起きてもおかしくないって？ でもそれは100%有り得ないと思う。

マチガイなんて全然起きそうもない、だってこの人「優花ラブ」だし。

単身異国にやって来て、プロポーズをしようと思った女性が行方不明、泊まる場所もない。そんな人を寒空の下に追い出すなんて、あたしはそこまで鬼じゃないわよ。

「一晩だけです。風邪なんか引いたら大変です」

そう、彼の一途さと誠実さに得点1。

「……いいんですか？」

申し訳なさそうにおずおずと聞き返すベルナルドに、あたしは精一杯の笑顔を向けて快諾しようとした。

けれど、あたしの胃はどうやら限界らしい。グーと大きな音で食べ物を要求してきた。

タイミングってものがあるでしょ。空気読んでよね、あたしの胃！「フフッ」

ベルナルドの曇った顔が一転、太陽の日差しが射すようなまばゆい笑顔で――笑われた。

「し、仕事終わってまだ夕飯食べてないんです！」「笑う事ないじゃないの、もう。」

「ごめ、なさい……」

それでもベルナルドは笑う事をやめない。

すぐ食べるから、とコンビニで温めてもらった牛丼は、蓋に水滴を残して冷え切っていた。

色気のないあたしの夕飯、温め直すか……。

げっ、すぐ近くだからって一緒の袋に入れてもらった缶チューハイがぬるくなってる！

あちゃー。



今朝は9時起床。せっかくの土曜日なんだからもう少し寝ていた  
いんだけど、あたしはちよつと早めに起きた。

だって、ねえ……。

そそくさとスウェットを脱ぎ捨て、もう少し見栄えの良いジーン  
ズとストライプの長袖シャツに着替える。パジャマ代わりのスウェ  
ットは毛玉だらけで伸びきっていて、とても着心地の良いものだけ  
ど、ちよつと男性に見せるわけにはいかない状態なのだ。

うーん、新しいの買おうかな……。

そつと寝室のドアを開けると、ソファの端が見えた。あたしはも  
う少し開けて顔をひよいと出す。

カーテンを締め切った薄暗いリビング。ソファの背もたれを倒せ  
ば簡易ベッドなるそれに、毛布に包まれた丸い物体を発見した。

ゆっくりとした規則正しい呼吸の上下運動が見える。ベルナルド  
はまだ寝ているみたいだ。

大きい身体を猫のように丸くして寝ている姿を想像して、あたし  
はプフッと噴き出した。願わくば、毛布をひんむいて確認したいけ  
れど――ダメだってばあたし！

「ベルでいいよ、友人にはそう呼ばれているから」

昨夜、ベルナルド――もといベルはあたしに気を聞かせてそう言  
ってくれた。もっと早く言ってよね！　っていうのはただの逆恨み  
だけ。

実は、ベルナルドさんって言うおうとして何回か舌を噛んだ。

代わりにあたしも呼び捨てにしてもらって敬語も無しにした。ア  
ゲハさん、なんて呼ばれ慣れなくてくすぐった過ぎるもん！

あたしは寝室からそつと抜け出して洗面所へ向かうと、顔を洗っ

て軽く化粧を始めた。

スッピンは無理！　でもがつつり化粧するわけにもいかない。だって意識してるみたいで……。

まあ、多少なりとも意識はしちゃうけど。でもそれはしょうがないでしょ？　イケてるメンズが一つ屋根の下にいるんだから。

「さて、やる事はやったわ……」

あたしは腕を組んで洗面所の壁に寄りかかり、そこから6畳ほどのリビングダイニングを眺めた。

この部屋は無駄に1LDK。だから知らない男の人と同じ部屋で寝る——という事態にはならなかった。そうじゃなかったら、そもそも「泊まってく？」なんて気軽には言わなかったけどね。

一人暮らしだから1Kでもいいんだけど、玄関開けてベッドが丸見えていうのにかなりの抵抗があった。

ほら、もし強盗が入ってきたら即効見つかるでしょ。一応あたしも乙女ですから、身の危険は回避したい訳ですよ。

だから寝室の手前にリビングがある部屋を選んだ。いざという時は寝室に逃げて、そこから外へ逃げるのだ。

まあ、ここ2階なんだけどね。

そんなこんなで3分経過、ベルはまったく起きる気配がない。

もし時差ボケで起きられないのなら無理に起こしちゃ可哀想よね

？　でも早く優花さんの行方を調べたいだろうし……。

「ああ、するべきか、否か——それが問題だ」

あたしはハムレットになりきって両手を天に向け、独り言をつぶやいた。

どうでもいい事だけど、あたしは高校の頃に演劇部でハムレット役をやらされた。弟がやるはずだったハムレットを姉のあたしがやるハメになった苦い思い出。

あたしの2つ下の馬鹿な弟は、本番1週間前に足を骨折した。

あたしと喧嘩の末、家の階段から落ちたせいで——責任転嫁にも程があるって思わない？

……別に、あたしが落としたんじゃないんだからねっ！

「ん……」

そんなハムレットがソファの横に立つと、気配を察知したのだからベルは、身じろぎして毛布から顔を出した。

寝癖なのかわからないけど、昨日よりも髪の毛のカールがくるくるしている。

か、かわいいっ！

子供だったら即効で頭ナデナデしちゃうくらい触りたい髪の毛。でもベルは大人の、それも男性。しかもあたしより1つ年上の27歳だと聞いた。

もし年下だったらナデナデしてたかもしない。

気を取り直して、

「おはよっ」

あたしは目を開けたベルを見下ろしながら声をかけた。

けど……あれ、無反応？

彼は天井の模様をじっと見つめて——そのまま目を瞑った。

ちよっと！

せめてあたしには気づいて欲しかったけれど……まあいいか、起きるまで寝かせておこうかな。

そう思ったけど……思っただけだね。あたしはどうしても抗えなかったのだ。

ちよっとだけ、ちよっと観察するだけ——だってイケメンの、それも外国人をまじまじと見るチャンスなんてないもの。

あたしはそこにしゃがむとじっとベルの寝顔を見た。

そう、まさに眠れる森の王子様！

羨ましいくらい長いまつ毛、形の良い唇、艶やかな黒髪……。

あたしは無意識に、そっとカールした毛先に手をのばしていた。思った通り一本一本が細くてやわらかい。

しかもなんだこのキューティクルはっ！ あとで何のシャンプー

使ってるのか聞いてみよう、と心の中にメモをする。

手触りが気持ちよくて、ふと実家で飼っている黒い毛のラブラドールを思い出した。

毎朝、目覚ましが鳴る30分前にあたしの上に乗って起こしてくれた迷惑なヤツ。それがもうかわいくて重くて何より犬臭くて……あーもう実家が恋しくなっちゃったよ。

モフモフを充分堪能したところで、あたしはそっと立ち上がろうとした。

ちゃんと起こさないようにそっと髪から手を離したと思ったのよ？  
けれど、急にベルの腕が伸びてきてあたしの腕を掴んだ。

やばい、起こしちゃった！

「ごめん、つい——わっ」

でもその先は言えなかった。

ベルにぐいと腕を引かれて、あたしはソファに転がされた。知らないうちにごろんと回転していて、気づいたら目線は天井。

あれ、と思うまもなくあたしの上にはベルがいた。心地よい重さにのしかかられてほんの一瞬だけ息が詰まる。

でも重くないのはベルが腕で自分の体重を支えていたから。

彼は起きてるんだか寝てるんだかわからないような、とろんとした目であたしを見ていた。

「ユーカ……」

「ちょ、ちょ……」

ちよっと待ってエー！

力いっぱいベルの胸を押して離そうとするけど、あたしの力じゃ全然ムリ、びくともしない。

これは——非常にマズイ！

「ねえ、あたし優花さんじゃないからっ！」

けれどベルは自分の胸にあてがわれたあたしの手を握って離すと、そっと手首の動脈に口付け、邪魔するなど言わんばかりにそのまま腕をソファに押さえ込んだ。

そして——あたしの鎖骨に唇を這わせはじめる。

「やっ、ベル……！」

香水の匂いが鼻腔をくすぐり、言いようのない高揚感が全身を駆け巡る。

だ、だめ……。

「あ、あのっベル！」

「しーっ」

ベルは人差し指であたしの唇に触れた。

思わず黙ってしまったあたしを見つめると、その顔を……唇を近づける。

キスされる——そう思った瞬間、あたしは顔を背けた。

腕も身体も押さえられたあたしが唯一動くのが顔だけだったし、もうそれしか逃げ道がなかったから。

どうしよう、どうしよう！ と慌てるあたしの頬に、ちゅつとやわらかい感触を感じた。

ギャーーーーー！

あたしは心の中で叫んだ。多分、本当に叫んではないと思う……。

「ア、アゲハ！？」

不意に軽くなって、ベルがあたしの上から飛び退いたのだとわかった。

あたしも急いでソファから起き上がる。

心臓がばくばくと音を立てて肋骨を叩き、アドレナリンがハンパないくらい放出して身体中を駆け巡っている。

ベルはイタリア語で何かを呟くと、日本語で謝ってきた。

「ご、ごめんアゲハ、本当にごめん！」

ベルは顔面蒼白だ。

「だ、だ、だいじょ……」

未遂だったから——ほっぺチューは未遂でしょ？

「夢を見ていて、寝ぼけてしまって……ああ僕はなんて事を！」

ベルは両手で頭を抱え、可哀想になるくらい取り乱していた。

「いや、あたしが悪いの、起きたのになって思ってた……」

あれ、襲われたあたしがフォローするって……なんかおかしくない？　じゃなくって、この場合勝手に近づいたあたしが悪いのよね。

「だからほんと、全然気にしないで！」

しかもあたし、ベルに比べればまだ冷静だ。

「僕は何かした？　アゲハを傷つけた？」

顔を向けて心配そうに見つめるベルと目があった。

「うん、何にも——」

あたしは無意識にベルの唇が辿った鎖骨を撫でていた。抵抗してもどうにもできなかった。

おとこのひとの——つよいちから。

不意に、あの瞬間に感じた熱を帯びた唇を、耳元にかかった熱い吐息を思い出す。

顔がカーツと熱くなるのが自分でもわかった。

少し落ち着いたはずの心拍数が急上昇し始める。

「アゲハ……？」

「ううん、何も、何もされてないから！　ホントに！」

ちよっと血液が沸点超えそうだっただけ。あと心臓が壊れるくらいドキドキしっぱなしなだけ。

そしてそれはまだ、現在進行形なわけで——。

いい加減もう止まって心臓！　いや、止まっちゃヤバイ。

あたしも思ったより冷静じゃないのかも……。

何でシャツ着てないの！ 何で上半身裸なの？ 外国人はみんな  
そうなの？ とか思いながら、あたしはキッチンでコーヒーマーカ  
ーのボタンを押した。

平常心……平常心よ、アゲハ。

背後ではベルがゴソゴソと着替えている。チラ見したい衝動をな  
んとか堪えて、あたしはコーヒーマーカーから滴り落ちる黒い液体  
に集中した。

あんなの弟と一緒にしよう。

あの割れた腹筋も、細いののに逞しい上腕二頭筋も弟と同じ。腕相  
撲では勝てなくてチョコケーキを奪われ続けたあの忌々しい上腕二  
頭筋。

あたしはいつも負けてモンブランかショートケーキだった。チョコ  
ケーキが食べたかったのに。

そもそも何でいつもおやつを取り合いは腕相撲だったんだろう？

そんなのあたしが不利じゃない？

どうでもいい疑問があたしの脳裏を過ぎった。まあいいわ、過去  
は振り返らない——それが深山揚羽。

オーケー、よし、その調子！

決して「あの腕に腕枕してもらいたあい」なんて思っちゃいない！  
ちらっと横目で見てみる。だってあたしはもう仏のように穏やか  
なココロだったから。

ベルはまだ着替え途中だった。

頭にすっぽりとかぶったシャツの裾から腹筋が見えて、ベルトで  
締めていないジーンズが腰からずり落ちそうで、その先は——。

ベルが視線に気づいて振り向く前に、あたしは勢いよく顔を戻し  
た。

違う……全然弟と違う。

もう、ダメ……！

朝食の準備をしながらもあたしはしばらく挙動不審で、何もない所で躓<sup>つまづ</sup>いたり壁との間合いが取れずに肩や膝をぶつけたりして、その度にベルは驚いた顔を向けた。

誰のせいよっ！

コーヒーとトーストで軽い朝食を済ませた後で、あたしは早速アパートの管理会社に電話した。まあ、やはりというか、即答で個人情報はお伝えできませんと言われた。

隣で耳を澄まして聞いていたベルの落胆の色が見えて、普段はあまりしないんだけど、あたしは食い下がって聞いてみる。

「なんとかありませんか？ 真田優花さんの友達が訪ねて来たんです。連絡が取れなくてとても困っているんです」

「申し訳ございませんが……」

「じゃあ、こちらの電話番号を教えて下さって結構ですので、連絡頂けるようお願いして欲しいのですが？」

「申し訳ございませんが――」

その台詞、20回目だぞ！ もう、いい加減折れてよね！

ちなみにあたしの「なんとかありませんか」云々も同じくらい言ったハズ。

「わかりました、どうも！」

イライラした口調になったのはしょうがない。あたしは携帯の通話オフボタンを連打して切った。固定電話だったら受話器をガシャンと投げていたところだ。ちなみにこの部屋に固定電話は引いていない。

「ダメだった！」

携帯から相手の声が漏れていたからある程度は聞こえていただろうけど、あたしはベルに優花さんの情報が得られなかった事を告げた。



「そうみたいだね……」

肩を落としてそう呟くベルを見ていたら、どうしてもなんとかしてあげたくなってしまう。なんて言うのこれ、母性本能をくすぐるっていう感じ？

ああ、もうっ！

「次、大家さんの所！」

さあベルナルド、ヘコんでる場合じゃないわよ！ 愛しのシンデレラを探すんでしよう！

——そして、あたしとベルは、池袋のサンシャインシティに向かった。

なんでこんなデートスポットにいるかって？

話は長くなるんだけどね、大家さんの所にいったら、あらあら彼氏？ という話から始まって、寿退社の話とか、英語喋れるの？

あらイタリア語だったわねウフフ……とか、あたしが無駄に心配していた事柄をつらつらと並べ語られ……やっと思解を解いてあたしが前住民の事を尋ねたら、大家さんはこう言った。

「知らないわねえ、でも池袋のサンシャインなんかの、なんとかってお店でアルバイトしているって言ってたわよ？」

その話を聞き出すまでに30分かかったという事は言うまでもない……。

そんなこんなであたし達はここにいる。

しかもめっちゃ居心地が悪い。だってすれ違う人みんな、あたしが連れてる外国人を盗み見て次にあたしをちら見する。その後はフーン……といった表情になる。

なんか、腹立つんですけど。

ジーンズに黒のテラードジャケットを着ただけの恰好なのに、ベルはモデルみたいにカッコイイ。ジーンズのポケットに親指だけ突っ込んで信号待ちをしているその姿は、まるでカメラを意識して

佇んでいるみたい。

ちなみに、横にいるあたしは同じくジーンズにカーキのブルゾン。それと使用感のあるCOACHのバッグ。

うーん、普通過ぎる……せめてかわいいスカートかセクシーなシヨートパンツにすべきだったかしら？　そしたらベルと並んで歩いても違和感ない？

「信号が変わったよ？」

シヨーウィンドウのガラス窓に映った自分の姿を眺めていたらベルに声をかけられた。

ベルはあたしの目線を追ってガラス窓を見ると、そのガラス越しにあたしと視線を合わせる。

「え？　ああゴメン！」

あたしは急いで横断歩道に向き直ると大股で渡りはじめた。

ガラスに映った自分を眺めている姿を他人に気付かれる事ほど、恥ずかしいものはない。

だって「この人、自分の姿見て自分イケてる！　って思ってるんだろうな」って思われてるでしょ、絶対。

あたしハズカシー！

人を掻き分けてやっとサンシャインシティに辿り着いたあたしとベルは、名前しか知らない女性を探すため、エスカレーターを下りて地下へ向かった。

雑貨屋、服屋と端から順番に店に入っては出てを繰り返す。

きつとどこかのお店で「真田優花は私です」って名乗りでてくれるシンデレラを捜し求めて。

ベルは期待に胸を膨らませて、店に入る度にキョロキョロと店員さんを眺めていた。目が合った女性は、もれなく全員ドキッとしているハズ。

そして、王子の従者であるあたしはこう言うのだ――。

「すみません、こちらで真田優花さんって方は働いていますか？」  
地下1階、地上1階と回って、只今2階の高級そうなアクセサリ  
ー店なう。

「はあ……少々お待ちください」  
いらっしやいませ、と愛想よく声を掛けてくれた店員さんがベル  
に目を向けて頬を染めた後、あたしの質問に首を傾げて奥へと消え  
る。

ちょっと待っても戻って来ず、暇を持て余したあたしはガラスの  
ショーケースにあるアクセサリを眺めた。

「あ、かわいいー」

最近、アクセサリを買ってないなあ。むしろこういったものはプ  
レゼントして欲しいけど……。

「よかったらお試しになりますか？」

物欲しそうに見ていたかしら……？ 別の店員さんに声を掛けら  
れた。

「あ、いえ、大丈夫です……」

「どれみてたの？」

やんわりと断ったらいつの間にかベルが隣に現れる。

店員はニコニコしながらショーケースからネックレスを取り出し  
た。

素材はフェミニンなピンクゴールドでバラのモチーフ。中心にあ  
る赤い宝石は多分ルビーだ。

値段的にキュービツクジルコニアじゃないと推測。

「宝石はルビーなんですよ」

ほらビンゴ！

「本当だ、かわいいね」

「彼女さんにお似合いだと思いますよ？」

「うん、きつと似合うだろうな……」

小さなバラを手に微笑むベルのその顔が幸せそうで、多分優花さ  
んを思い描いているんだと思った。

あたしだってこういったカワイイものを見れば、かわいっ！　っ  
て思う。

けれど、実際似合うかって言うと180度別次元。

弟がいるせいかな、あたしは少々ガサツらしいから。もしも優花さんが見つかったらイイ男に好かれる秘訣を聞いてみようと思っただけ  
れど、聞いたところで実践できるかって考えたらちよつと無理な気が  
してきたぞ。

「お客様、お待たせしました」

おっと、最初に尋ねた店員さんが戻ってきたみたい。

「申し訳ございません、当店ではそういったスタッフはおりません」

「あ、そうですか……わざわざすみません、ありがとうございます  
た」

頭を下げる店員さんに、あたしも同じくペコリと頭を下げた。

正直ここまでわかっていればシンデレラはすぐ見つかると思っ  
た。

しかも、ロールプレイングゲームの冒険みたいでちょっとワクワク  
しちゃってた。ほら、村人に聞いてヒントを得てさ、少しずつ目  
的に近づくってヤツ。

それからあたし自身、男性と二人きりで出歩くという行動も久方  
振りで、デートみたい！　って少し調子に乗って服を見たりと楽し  
んでしまった。

けれど、シンデレラ探しは予想以上に難航していた。

サンシャインシティの人々はゲームの登場人物のように簡単には  
情報を与えてくれないのだ。

あたしがそんな質問をすると不審者扱いする店中にはあって、  
必ず冷たい視線で睨まれてスタッフの情報は教えられせんって言  
われる。

ホント、現実って冷たいのね――。

「疲れたねっ！　もう足パンパン！」

「アゲハ、僕のせいで色々歩かせてしまつてごめんね……」

「あ、いや違うの。えっと、あたしの運動不足が原因みたい！」

これだからデスクワークは嫌よね！　と苦笑いで誤魔化してみるけれどベルは眉根を寄せて微笑むだけだった。

なんとかなる！　と思つて始めたシンデレラ探しは結局なんともならなくて、ベルのガツカリした顔を見る度にあたしはなんて役不足なんだろうと感てしまい胸が苦しくなった。

自分でもどうしてこんな気持ちになるのかわからないから厄介だ……。

「とりあえず何か食べよう！　お腹すいてちゃん良い案も思いつかないし、ね！」

ここはサンシャインシティの上階にある夜景の見えるイタリアンレストラン。

けれどあたし達は夜景の见えない席で向かい合つて座つた。夜景を見るためには予約が必要なのだ。

静かな雰囲気、小さめの音量でクラシックともジャズともいえないミュージックが流れている。けれど高級なレストランではない。

うん、こういうお店好きだな……恋人同士で来たりしたらもう最高なんだけれど、ね。

「あたし海老のクリームパスタにしようかなあ。ベルは？」

「うーん、メニューが半分くらい読めないみたいだ」

「え、そうなの——つてそうよね、ずっと一緒にいて全然気づかなかった！」

「アゲハ、読んでくれる？」

気付かせないなんてすごいだろう？　と言いたげな、いたずらっぽ

い笑みを向けられて、あたしは思わず言葉を飲み込んでからこくりと頷いた。

「なんかこの店暑いんですけど……。」

あたしは自分の見ていたものを横に置くと、ベルがテーブルの真ん中に広げたメニューに向き直る。

「えっと、じゃあ上から読むね」

漢字で書かれた野菜や具材の単語は解る範囲で英語にするとベルも理解してくれるし、カタカナ名はそのままイタリア語だった。

「僕は平仮名だけなら読めるんだ」

「へえ、日本語と平仮名は優花さんに教わったのね？」

「いや、違う。祖母が日本人なんだ」

「そうなんだ!？」

なるほど、だからあまり聞かない単語も知ってるわけだわ。「性急」とか、一瞬頭の中で漢字を探しちゃったわよ。え、請求? みたいなの。

それに他の外国人ほど近寄りたがりな雰囲気を感じられなかったのも4分の1が日本人だったからかも。「同じ日本人」という接点の一つ見つかった気がしてあたしは無性に嬉しくなる。

「日本語と平仮名は小さい頃に教わった。けどカンジはフクザツで難しいね」

苦笑いで微笑むベルの顔があまりにも近くて、あたしは不覚にもドキリとしてしまった。この笑顔は重罪でしょう……。

「えっと、あとは――ワインは飲む？」

急いでベルから視線を外してあたしはメニューのページをめくる。ベルがテーブルに乗り出すと、風が生まれてふわりと香水の匂いが届いた。瞬時にあの時の――押し倒された時の記憶が蘇って、あたしは思わずのけ反った。

「どうしたの?」

「な、なんでもない!」

ベルの存在を意識してしまい、しかもこんな乙女的な過剰反応を

する自分にも驚いて、余計にドキドキした。お、落ち着け、あたし！

「はい、アゲハ」

デザートを運んできたウェイターがその場を離れると、ベルは小さな箱をポケットから取り出してテーブルの上にトンと置いた。

ベルと最初に出会った時に見た、指輪が入っていたような小箱。それを指で押してあたしの方へ滑らせる。

普通なら、わぁプレゼント！ って期待するんだけど、今回ばかりはそれは有り得ないとわかっていた。あたしそこまでおめでたくなirmんね。

「開けてみて」

ベルは青い瞳を細め、とろけそうな笑顔を浮かべている。

「何でそんなにニヤニヤしてるのよ？」

「いいからいいから」

あたしは不思議に思いながら蓋を開けた。優花さんへのプレゼントをあたしに見せて、ノロケ話でも始める気か？ って構えながら。中身は今日見たバラのネックレス。

一緒にいたのに気付かなかった……いつのまに買ったの？

「あのネックレスね、やっぱりかわいいなあ。これがどうしたの？」

「付けてみて。きっと似合うと思うから」

はい——？

「え？ あ、あたしに？ あたしが付けていいの？」

あたしはそう言われるまで優花さんへのプレゼントだと思っていた。間違っても自分宛てだなんて——まあ、普通は思わない。

だから余計に驚いた。しかも声が大きすぎて、いい雰囲気だったらしい隣の席から、チラッと視線が突き刺さる。

「それ、かわいいって言ってたから……」

突然の出来事に戸惑ってネックレスを見つめながら硬直していたら、ベルはそう言った。

確にかわいいって言ったけど……。

「あの……あ、あ、ありがとう」

聞こえるか聞こえないくらいの、か細い声であたしは呟いた。  
だって脳内はこれ以上にないくらい大パニックだったから。うわあ、ほんとに？ あたしが貰っていいの？

期待していなかったサプライズプレゼントほど嬉しいものはない。  
女性なら大好物でしょう？

それが恋人でなくても。ちょっといいな、って思ってる人だった  
らなおさら嬉しい。

あたしはおずおずとチェーンをはずして首にかけてみた。

鏡がないから自分では似合っているかどうか解らないけれど……  
でもこういうかわいいのは似合わないって自分が一番理解している。

付けてみたけどどうにも気恥しくて、ちらっと目線だけでベルを  
見たら、彼はワイングラスを片手に頬づえをついてあたしを見てい  
た。

「うん。アゲハ、やっぱりかわいい」

熱い瞳で恍惚と魅入るベルの視線があたしの胸元に絡みつき、そ  
れからゆっくりと視線を合わせてくる。

カワイイと面と向かって言われたからなのか、それとも別の何か  
が原因で、あたしの顔からボロボット高熱が発生した。

ゆっくりとワイングラスを傾けるベルの動作から目が離せない。  
このふわふわとした感覚はなに？ あたしもうワインに酔ってい  
るの？

ベルは、ひよっとしてあたしに恋愛感情を抱いている？ まさか  
……そんな事は有り得ない。ベルは会った事もない女性を愛してい  
るのだから。

あたしなんか一目惚れするはずなんかない。



目の前のワイングラスを手にとると、あたしはぐいっと飲み干した。

お願いだからそんな笑顔向けないで……あたしの事好きなのかもって期待しそうになるから――。

どうにか心にブレーキをかけると火照った顔から熱が引いて、あたしはやっと冷静を取り戻した。

ベルは――好きになってはいけない人なのよ。好きになった所で失恋確定なのだから……。

「あたし、あまり女の子っぽいアクセサリーって似合わないのよね……」

嬉しいという感情を思い切り出したいのに、恥ずかしくて、照れくさくて――ううん、そんな感情を彼の前では出してはいけない気がして、沈黙を破ってあたしの口から出た言葉は否定的なものだった。

ベルの顔からさっと笑顔が消える。

あたしはその瞬間にしまったと思った。せっかく贈ったプレゼントを喜ばれもせず似合わない、なんて言われたら嫌な思いをするのは明白だ。

本当はこんなに嬉しいのに……もうどうしていいか解らない！けれど口から出てしまった言葉はもう元に戻せない。いたたまれなくなつて、あたしは視線を下に向けた。

――もう消えてしまいたいと思ひながら。

テーブルの上で組んでいたあたしの両手に、ベルの温かい手がそつと重ねられた。

あたしはびくりと顔を上げる。

「アゲハはかわいいよ。どうしてそんな事を言うの？」

沈静化したはずの熱が触れられた手と、身体の中から一気に蘇ってくる。

「あ、あのね……ほら、あたしこんなかわいくない性格でしょ。良

く言われるのよ。ガサツだとか、可愛げがないとかって……」

あまり生き恥を晒すのは得策じゃないと思いながらも口から出る言葉は止まらない。

「多分弟がいるからなんだけど……ううん、それはただの言い訳で——」

「誰がそんな事言ったの？ アゲハはとてもかわいいよ。優しくて思いやりがあって——素敵な女性だ」

あたしの言葉を遮って言うベルの言葉があまりにも温かくて、心地よくて……だからあたしはなぜかわからないけれど涙が出そうになった。

「あ、ありがとう。そう言ってくれと……すごく嬉しい」

どうにか絞り出したあたしの小さな呟き声を聞いて、ベルはふわりと微笑んだ。

今まで見た中で最高の笑顔……。

今さらながらに気付いた——あたし、もうすでに恋に落ちている。こんな気持ちは初めてで、なんて説明したらいいのかわからないけれど、でもわかる。自分の気持ちに嘘が吐けない。

あたしベルナルドが好きだ。





恋とはどんなものかしら。

あなたがもし知っているのなら、どうか私に教えて欲しい。

この胸に渦巻いているのが恋心なのか、それとも別のものなのかを、教えて欲しい。

うっとりするほどの熱い想い……私にとっては初めての経験で、本当によくわからないの。

私の心の中にはとても愛おしくて眩しい想いがある。

ふわふわのわたあめのような甘さだったり、かと思えばたまらなくほろ苦いビターチョコレートのようなもので。

ぎゅっと胸が締め付けられて息ができないと思った瞬間、身体の内側からぽつと生まれる熱い想いで胸が高鳴る。

けれど、すぐにまた私の心は揺らいで不安でいっぱいになってしまふ。

私はこの気持ちをどうにかしてほしくて、誰かに助けを求めたいのだけれど、でもどうすればいいのかわからない……。

ため息を吐いて、へこんで、弱音も吐いて……もう諦める？　って思っ——ううん、気付けばもうすでに心を奪われているんだ。

いつもいつも、その笑顔に振り回されてドキドキして落ち着かなくて——でもこんな日常が、実は嬉しくて、楽しくて、安息感に満ち溢れているんだって私は知ってる。

もう知ってしまったの。

恋とはどんなものかしら。

あなたがもし知っているのなら、お願いだから私に教えて。  
この胸に溢れる想いが愛なのか、それとも別のものなのか――。

モーツァルト 『フィガロの結婚』 より  
く恋とはどんなものかし  
らく

（別名…恋の悩みを知る君は）

◆◆(後書き)

サブタイトルに使ったアリアの和訳ですが、直訳すると全然ちがうので、その点はフィクションとしてご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8407x/>

---

恋の悩みを知る君は

2011年11月17日03時10分発行